キリスト教学研究室紀要

第　7　号

－論文－

現代科学とキリスト教思想 ――人格概念の再考――
芦名 定道（1）

キルケゴール研究史における方法論について
――「実存弁証法」の再考――
谷塚 巌（17）

－研究ノート－

ヨハネ福音書8章18節の解釈 ―「私自身についての証言」とは―
香西 信（33）

H・R・ニーバー『啓示の意味』における「歴史」概念の分析
――歴史的方法と内的／外的歴史の区別――
加藤 良輔（41）

－書評－

ジャン・グロンダン(著)、末松壽、佐藤正年(訳)『解釈学』
岡田 勇督（61）

あとがき　(73)

２０１９年３月
京都大学キリスト教学研究室

２０１８年度・第二演習の記録

＜前期＞

４月１０日：芦名定道「オリエンテーション」、動向と総括：「３・11 東日本大震災・福島原発事故とキリスト教研究」（日本基督教学会『日本の神学』57 号、2018 年 9 月、掲載予定）。

４月１７日：波勢邦生「賀川豊彦の「霊魂」理解」

５月２２日：渡邉蘭子「アウグスティヌスにおける愛の秩序の問題――性・結婚・身体をめぐって」

金香花「訳語論争と等価」

５月２９日：洪伊杓「海老名弾正と中島重の「神の国」理解」

６月　５日：谷塚巌「キルケゴールの倫理思想再考に向けての準備的考察」

６月１２日：ブラジミロブ・イボウ「Ｐ．Ａ．フロレンスキイの『真理の柱と基礎』における知識的問題とその神学的意義について」

６月１９日：森川甫「カルヴァン『福音書註解』「たとえ話」研究」

６月２６日：香西信「ヨハネ福音書８章１２節～２０節の釈義と問題点の整理」

７月１０日：加藤良輔「遠藤周作『沈黙』における証言と物語」

山中健司「矢内原忠雄の「日本的キリスト教」における三つのエートス――聖書信仰・日本精神批判・国体観念」

７月１７日：洪伊杓「海老名弾正の弟子たちの神道理解――吉野作造・柏木義円・石川三四郎を中心に」

７月２４日：南裕貴子「フライターク「伝道の神学」における「旧い教会」と「若い教会」」

リチャーズ・ティエリ「現在東京丸の内におけるローマ書１：１８―２：１６の聖書的意味」

＜後期＞

１０月　４日：芦名定道「オリエンテーション」、「現代日本における殉教論と歴史的記憶」

１０月２３日：谷塚巌「いくらか近代化されたギリシア的なもの」

平出貴大「前期Ｐ・ティリッヒにおける形而上学の構造――啓示の出来事とその語り」

１０月３０日：洪伊杓「「海老名弾正の神道理解と社会思想形成」に関する序論と先行研究分析、目次」

１１月　６日：渡邉蘭子「親密圏への愛はいかにして肯定されるのか――アウグスティヌスにおける隣人愛および共同体の問題」

山中健司「矢内原忠雄の「日本的基督教」における三つのエートス――聖書信仰、「国体」観念、日本精神・神道批判」

１１月１３日：森川甫「ジャン・カルヴァン『共観福音書註解』における宗教思想の起源と展開」

１１月２０日：香西信「ヨハネ福音書８章１２節～２０節の釈義と問題点の整理（２）
——歴史的設定の確認とイエスの言葉を支える「私が私についてする証言」について」
１２月　４日：平出貴大「Ｐ・ティリッヒの宗教思想における方法論的問題」
加藤良輔「Ｈ・Ｒ・ニーバー『啓示の意味』における「歴史」概念（２）
——歴史的方法と内的／外的歴史の区別」
１２月１１日：波勢邦生「賀川豊彦の「実現の神学」」
１２月１８日：ブラジミロブ・イボウ「パヴェル・フロレンスキイの宗教思想における友情、嫉妬、知識」
リチャーズ・ティエリ「現在東京丸の内におけるローマ書１：１８―２：１６の聖書的意味」
１　月　８日：南裕貴子「ヴァルター・フライタークの思想の背景と経歴」

＜春期・大学院生研究発表会＞
２０１９年
３月１３日：日本基督教学会・近畿支部会（３月２６日・神戸女学院大学）における個人研究発表予定者による予行演習。

あとがき

◆『キリスト教学研究室紀要』第７号をお届けいたします。京都大学キリスト教学専修（研究室）刊行の「研究室紀要」も、２０１３年度の創刊から、今回で第７号を迎えました。紀要第７号を無事に刊行できたことについて、執筆者、そして編集担当者に心から感謝申し上げたい。

◆京都大学のキリスト教学研究室は、教員と大学院生を中心に構成された研究者の研究共同体として運営されているが、そこで取り組まれる研究テーマは多岐にわたっている。構成員（大学院生）が実際にどのような研究を行っているかは、本号に収録された「２０１８年度・第二演習の記録」に記載された通りである。

◆この「研究室紀要」は、キリスト教学研究室の研究内容を広く公開するとともに、所属の大学院生に論文などの執筆機会を提供することを目的としている。それは、学問世界においてすでに広く浸透している成果主義という現実に対応するためであるが、近年、このことと共に目立つのが、論文執筆などをめぐる研究者倫理の問題であり、大学でも厳しい対応が求められている。２０１７年度から、京都大学文学研究科でも、修士論文と課程博士論文の執筆者には、研究者倫理に関する対面チュートリアルが義務づけられるようになった。また、キリスト教学に関連の深い思想系の諸学会でも、倫理規定の制定が行われつつある。こうした点を踏まえるならば、本紀要においても、査読体制を確立することがいずれ必要になるであろう。これは、引き続きの検討課題となるが、当面は、大学院生の研究論文、研究ノート、書評に加え、教員（常勤と非常勤）や課程終了者による研究論文を掲載することによって、研究論集としての十分な水準が確保されるよう心がけたい。

◆２０１８年度のキリスト教学専修の課程終了者は、下記の通り、学部卒業生が１名、修士課程修了者が２名である。

・卒業論文：中原みなみ「賀川豊彦におけるキリスト教思想と宇宙論」

・修士論文：香西　信「ヨハネ福音書におけるキリスト論の一考察――8章12節の「我は」章句解釈を中心に」

山中健司「矢内原忠雄の「日本的基督教」の基本構造――聖書信仰、「国体」観念、日本精神・神道批判」

２０１９年度は、６名の学部生、３名の修士課程入学者、１名の博士後期課程編入者を新たに迎える。世代交代（？）という表現が適当かもしれない。また、研究室の留学生は２０１８年度から所属の博士後期課程１名、研究生２名に加えて、２０１９年は１名の研究生が本専修所属となる。２０１９年度からのキリスト教学専修の新しい展開にご期待いただきたい。

◆本紀要は、研究室のホームページ、あるいは京都大学学術情報リポジトリにおける公開を中心としており、基本的には電子ジャーナルとして企画されている。一定部数の印刷製本も行われるが、それは必要最小限のものとなる。電子ジャーナルとすることによって、キリスト教学研究室の研究活動が研究室外の方々に広く知っていただけるならば、幸いである。

２０１９年３月

キリスト教学専修・教授
芦名定道

The Annual Report on Christian Studies

Ⅶ

CONTENTS

Articles

Modern Science and Christian Thought. Toward reconsideration of personality concept
ASHINA Sadamichi (1)

Reconsidering 'Existenzdialektik' in Kierkegaard Studies
TANIZUKA Iwao (17)

Notes

The interpretation of John 8:18 ; Validness of Jesus's testifying on his own behalf
KOZAI Shin (33)

An Analysis of the Notion of History in H. R. Niebuhr's *The Meaning of Revelation* :
A Historical Method and the Distinction between Internal and External History
KATO Ryosuke (41)

Book Review

Jean Grondin, *L'herméneutique*
OKADA Yusuke (61)

Afterword (73)

March, 2019
Faculty of Letters, Kyoto Univeristy, Department of Christian Studies
Kyoto Japan